

旅する文学

文芸評論家・斎藤美奈子

静岡編



井上靖ゆかりの地に立つ「しろばんばの像」静岡
県伊豆市湯ヶ島、全日本写真連盟・植田進さん撮影

熱海の海岸には、マント姿の男が日本髪（にっぽんかみ）の女を蹴飛ばす像が立っている。明治のベストセラー、尾崎紅葉『金色夜叉』（1898年／新潮文庫ほか）の一場面を再現した、いわば熱海のランドマークだ。

男は間貫一、女は鳴沢宮。二人は許嫁同士だが、銀行家の息子との縁談を受けた宮の裏切りが貫一には信じられない。必死の説得を試みるも失敗。ついにはへちまえ、腸の腐つた女！ 姦婦！！という捨てぜりふとともに恋人を蹴飛ばすのだ。

DVの現場というべきこの像の今日的な価値はまあ、反面教師としてのそれだろう。〈話があるから今夜は一所に帰つて〉という宮の懇願に貫一は耳を貸さなかった。

温暖なイメージとは裏腹に、静岡県はかような愁嘆場を含むドラマチックな物語の舞台になってきた。

『金色夜叉』と同じ明治のベストセラー、泉鏡花『婦系図』（1908年／新潮文庫ほか）もそう。これは知的エリートが後に豹変する、近代の日本文学には珍しいピカレスク・ロマンス（悪漢小説）である。

主人公の早瀬主税は陸軍参謀本部のドイツ語翻訳官。が、前歴は「一筆の力」を名乗るスリだった。芸妓だった恋人との仲を引き裂かれた彼は失意の中で故郷の静岡に戻り、ドイツ語塾を営みながら、出自や血筋にこだわる上流の者たちへの復讐を誓うのだ。ラスト、静岡の名門一族当主との対決シーンは市内の名所・久能山。しかもそれは日蝕の日であった。太陽が欠ける中で火を噴くピラ

少年の成長と青年の激情と

トル。庄巻の幕切れである。

伊豆半島に目を転じよう。

といえは、外せないのはやっぱり川端康成『伊豆の踊子』（1927年／新潮文庫ほか）だろう。天城峠の茶屋で旅芸人の一行と出会った一高生が下田に向かうロードノベルだが、彼は踊子への思いが恋だと気づき、別れた後の船で泣く。これも一種の失恋小説といえる。

もつとも、仮に伊豆を代表する文学を1作だけ選ぶなら、私は井上靖の自伝的小説『しろばんば』（1962年／新潮文庫）をあげたい。舞台は大正期の中伊豆・湯ヶ島。

主人公の洪作は母の実家の一角にある土蔵で、曾祖父の妾だったおぬい婆さんと暮らしている。そんな複雑な人間関係の中で、少年は人生を学び、沼津や三島や下田へと行動半径を広げる過程で外への目を開いていく。『伊豆の踊子』が外から来た若者が旅する物語なら、こちらは少年が伊豆を旅立つまでの物語。胸キュンの少年文学といえるだろう。

一転して現代の静岡。乾くるみ『インシエーション・ラブ』（2004年／文春文庫）はバブル期の静岡市を舞台にした青春小説だ。主人公の鈴木は静岡大学の学生。市内の歯科医院で働くムユと合コンで出会って付き合いはじめた。が、就職した鈴木が東京勤務となり、遠距離恋愛をはじめた頃から二人の仲はこ

じれはじめ。都会の暮らし。新しい恋人。ありがちな恋愛の顛末。と見せかけて、この小説、じつは最後の2行で大逆転劇が起こるのだ。巧妙なしかけて読者を驚愕させた、平成のベストセラーである。

再び熱海。貫一と宮の物語は橋本治の遺作となった『黄金夜叉』（2019年／中央公論新社）で現代に甦った。貫一は東大の経済学部生。美也はぐっと今風にMIAの名前でモデルもしている大学生。美也の結婚相手も今風で、大手サイトを運営するIT企業の社長である。

〈大人になったかったの。ごめんね〉の一言でふられた現代の貫一に恋人を蹴飛ばすなんて野蛮なまねはもうできない。熱海の海岸に立つ像を見て彼は思うのである。〈怒ってすむなら簡単だよ〉〈僕は、勘違いをしてたんだ。僕は、なんにも知らないで、ただ生きてたんだ〉

怒るかわりに声を上げて泣き、スラブを海に投げ捨てる貫一。ここには『金色夜叉』に対する批評性が感じられる。失恋で鼻っ柱をへし折られ、泣き伏す男たち。青年の人生はそこから始まる。穏やかな静岡の底には激情が眠っている。

物語の舞台や有名なシーンなどで知られる土地に焦点を当て、日本文学を旅します。原則毎月第1週に、47都道府県を順不同で紹介します。